レジェンド

一磨　洸平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レジェンド

【Ｎコード】
Ｎ０９９７ＢＡ

【作者名】
一磨　洸平

【あらすじ】
美しい峡谷を持つ国に住むトキナ姫は十七歳の誕生日に国を出ていった。
国の外はまだ戦国時代。

（Ｌｅｇｅｎｄ）トキナ姫

峡谷の朝は日の出前から始まる。

城の厨房ではカマドに火を入れ豆を挽き井戸水をくみ上げる作業に追われている。

森の中は小鳥が騒ぎ出し、家畜が餌を求めて鳴き始める、その声が谷の四方から聞こえる。

城は御山から流れる川を堀に流し、河原の真ん中の巨大な岩の上に作られている。

トキナ姫の日課は高い南の塔まで駆け上がり、垂れ下がった布を払いのけて塔の窓から急流の川に飛び込み対岸まで泳いで周辺を走り門番に隠れて城に戻る。

門番も濡れ鼠のトキナ姫を見て見ぬフリをする。

門番が注意をしても聞くような姫ではないからである。

濡れた身体のまま姫は厨房へ走り乳母で占い師のボルデェの朝食を運ぶ。

「トキナ様。昨日からの雨で川は濁っていたでしょう。大丈夫でございましたか？」

厨房の料理人はトキナ姫を心配する。なんといっても王妃が残したたった一人の子供。

にこりと笑ったトキナ姫が厨房を離れると

城内を歩き回っていた左大臣のヨウリが料理人に神経質な声をかけ

る。

「姫はよらなんだか？」
要らぬ世話だとおもうが父親の王がなかなか婚姻の日にちを決めぬので
娘のトキナ姫から積極的に話しを進めて欲しいヨウリである。

「先ほどボルディエ様のお食事を持って行かれました」と料理人。
左大臣が動き回る時は姫に無理な願い事押し付けるときだと料理人は長い城の生活で解っている。

「まったく、今日という日にいつもの振る舞い・・」
愚痴を言う左大臣を見送り、いつもより多い材料の仕込みに料理人は取り掛かる。
今日はトキナ姫の十七歳の誕生日。
王直々に料理の献立を言いつけられて忙しいのである。

器が二つだけ乗ったトレイと水差しを持って回廊を渡り北の塔の階段を駆け上がる。
隙間風が入らぬように石作りの部屋は分厚い布を張り巡らせている。

「ボルディエ、起きているか。今日は私が予言をしてやろう。そなたは昼までには王に呼び出しをされる支度をして待っているが良い」

トレイを片手に幾重にも張られた布を避けてテーブルの上に置くとボルディエはよそ行きのショールをかけて窓際に座っている。

「あれ、良い匂いですな。変わった匂いが混じっておる。何か私目の食事に入れましたな。ほほう、これは珍しいコッティの根を煎じましたね。それにファコム草・・どなたか中原に行かれましたかな。

私の記憶ではここ数十年、この国に旅人は立ち寄っていませぬが」
白濁した目でテーブルを見る。濡れた髪の毛のトキナがうっすらと見える。

「オババは鼻が良い」
と窓際まで近寄りオババの様子を見て微笑む。いつでも呼び出されていいように支度が整っている。

「これは私の婚約者殿にお願いして届いたものだ」
椅子ごとオババを抱え上げテーブルにつかせる。

「ほう！では姿絵と共に届いたのですか」
トキナはオババとの会話が大好きである。

「そうだ、物語には男は女にねだられると喜んで苦労する書いてあった。その通りであったぞ」
オババの手元までスプーンを寄せる。

「それは、それは・・」
明るい笑顔のオババである。物語の中の出来事を実際に行なう姫が微笑ましい。

開け放った窓を閉めて隙間に埋める毛布を拾い上げる。
「対岸の橋が壊れている。水量が増えたのが原因だな。御山の堰の工事を早めねばなるまい」
埃が立たないよう隙間を埋めるとおかゆを口に運ぶボルディエに横に立った。

「おやおや見てきたのかえ。私も食事がすめば大臣に会おうと思っていたところではあるが」

と窓に向けた顔が一瞬とまるいつの間にか足音を立てずにトキナ姫がそばにいる。
「いつから解っておったのだ？」とトキナ姫。

「さぁてね。わしは気まぐれだで。ほう、懐かしい味だね」
はてさて姫はいつから気配を自在に操れるようになったのなとボルディエは思う。
しかし無駄な考えを打ち切る。

「そろそろ父王の元にいきなされ、ヨウリ殿がここに登ってくる。
私はヨウリ殿と話しをしよう」
ヨウリのせかせかした心が近づいてきている。

「オババの言うとおりにするよ。ではまた後で会おう」
ボルディエの忠告は素直に聞く。

「ああ、ああ」と返事をしながらどうやってヨウリ左大臣の心を落ち着けさせようかと頭を巡らすボルディエ。

トキナ姫は塔の螺旋階段を無視して真ん中に開いた穴に飛び込み
ヨウリ大臣を交わして床に飛び降りると回廊の乾いた砂を蹴って大広間へと急いだ。
「父上」
又のそのようなところでとトキナは姫は苦笑する。

昨日届いたトキナ姫の婚約者トビアス王子の絵の前で
嫁ぐ日が近づいた姫を想い、ずっとこの広間でたたずんでいる。

娘の突然の登場に嬉しさが顔に出る。
「彼の身体の調子は、成長すると共に良くなっているようだな」

堂々とした体躯が王には眩しい。

「そのようですね」トビアス王子などには少しの興味も覚えないトキナ姫。

年を追うごとに居丈高になる立ち姿の男は血色の良い唇と見事な細工の剣を二本下げている。

恐らくトキナ姫が想像するに婿入りの際にはもっとしょぼくれた青白い男が現われると思っている。

父親は絵姿通りの男が来てくれると喜んでいるのに水をさす言葉がトキナ姫に浮かぶ。

その言葉をかき消して、

「父上、誕生会よりも先に話し合わなければならぬことが出来ました。ボルディエが予言をしています。も堰がいっぱいで決壊の恐れがあると」

思い出したように大事なことを何気に切り出す。

「何？また彼女を御山に連れて行くのか？そんな辛い行動をとらせたくはないぞ」

過去に浸っていた緩い想いは退き王の顔が曇る。

「オババは御山では死なぬ。父上は心配のしすぎだ」

腕組をしてこ絵を何処に置くかを考える。母親の隣にはトキナは置きたくない。

かといってこれから町の長老たちがこの城に登ってくる。

いちいちこの王子を中心に会話を交わすのも時間がもったいない。

「父上この姿絵を私の部屋に持って行ってもよかろうか」
裏返しにおけばよいのである。

「そうだの。そのために向こうは送ってきたのだから。それが良かろうの」
一瞬父親として躊躇したがまだ本物お婿が来たわけではない沸き立った心を静める。

「では、しからばごめん」
等身大の立派な額縁つきの絵をトキナ姫は持ち上げると王の前から王子を隠した。
「ついでにラッパのリスに東の塔に昇るように言っておく。後でヨウリが来るが少し話しを聞いてくれ」
と言い残して去ってしまった。

（Ｌｅｇｅｎｄ）　トキナ姫の旅立ち

リス（兵士）が見張り台の上にのぼりラッパを吹き鳴らすと
甲高い音が変な拍子で峡谷の隅々まで響き渡る。
朝食を終えた町の代表者や年寄りは朝の仕事を家族に任せて城への
道を歩き始める。

リスのラッパが届かない尾根の裏側には
家長に命令された子供が犬の背にまたがり知らせに走る。
昼過ぎまでには話し合いに参加しなければならない。

峡谷のあちらこちらの町から三々五々と人々が塵除けのマントをひ
るがえし
城に渡る跳ね橋を目指している。

トキナ姫は御山の地図と国の地図とを大広間のテーブルに広げる。
「はてさて、一日で話し合いは終わるかのう」

駆り出された使用人が広間の入り口で
椅子とテーブルとが大広間にセッテイングされていのに驚いている。

「私等の仕事は・・」
大広間の真ん中にはトキナ姫が一人。

「うむ、上の部屋を寝所に使うかも知れぬ、用意を頼む。飯の支度
もだ。あ、それからしお肉は出すなよ。話し合いのときは塩抜きに
限る」
旨い塩肉は食が進み眠くなるし塩分で水分を大量に取り厠へ立つ人

間が多く出る。

「へぇ、承知しました。そのように料理人には伝えておきます」
昼までには重いテーブルや椅子を運ぶつもりでやってきた使用人は
手持ち無沙汰のまま帰っていった。

「これから二、三日は皆、頭に血がのぼるな」
広げた図面を指でなぞる。

壊れた土手のせいで川幅が広がっている。石橋は流れてきた雑木と
ごろ石。
供出させる資材の調達と作業をする人員の配置の変更はかなりもめ
るに間違いない。
御山の堤作りも関わってくると二日や三日では話し合いは終わらな
い。

しばらくトキナ姫は地図を見つめていたがつと顔を上げて窓から入
った陽射しに目を向ける。
窓の外では昨日の大雨でラウール川が白い波頭見せ荒れ狂っている。

「では、私も用意をするか」

朝日が山の上に顔を出して谷全体を照らし始めると見慣れた木々、
美しい果樹園が浮かび上がる。
気の早い人間はリスのラッパの音で家を飛び出したらしい。
小僧を一人従えてつづら折れの峠道を転がるように歩いている。

婚約者の絵姿を空き部屋に放り込み
片手でもてるだけの荷物を懐に縛り付けて足早に塔の階段を登る。

トキナ姫は今朝降りた方角の窓の垂れ布は開けず下流に向かう流れの中に飛び込んだ。
大した水しぶきも上げずに城の見張りにも気が付かれずに
ぐんぐんと速い流れに身を任せていると
地獄への入り口のように真っ黒な大穴がラウール川の全ての水量を飲み込んでいる。

ぷかぷか浮いてきたトキナ姫は近くの岩に手をかけてよじ登り
大穴の壁伝いに暗い穴の奥底へと下りていった。

（Ｌｅｇｅｎｄ）　ゲルタ王子

なだらかな街並みを越え遠くに霞む山並みの
その向こう側ではたくさんの兵士がにらみ合っている峠がある。
石畳を早馬が駆け下りてくるたびに、ゲルタ王子は馬の足音に震え上がる。

ゲルタ王子には兄が七人居る。そのうちの二人は最近戦で死んでいる。
一番上の兄を隣国に騙されて殺され、このことが引き金になり長引く戦になった。

戦の元凶、隣国ガーナリア国は古い血筋を大事にするあまり、王族間での揉め事が多く続き、
短命な一族の未来を憂い中原の古い血筋の王族との婚姻を望んでいたが、
ガーナリアの王の傲慢な噂は、中原の主要五カ国に知られ、どの国からも良い返事は得られず、
中原を真似て新しい新興宗教にも傾倒したせいで国の財政は急激に圧迫した。
そこで財政を潤わすために、ガーナリアの王は隣国のメノル王国に目をつけたのである。

メノル国には健康に少々不安のある長男がいる。
ガーナリア王国の姫の婿にと再三に渡る懇願をされメノル王は憂いを払拭し持参金をつけて長男を送り出した。
婿が到着早々ガーナリア国は婿ミナル王子を入城と同時に付き添ってきた従者共々惨殺した。

支度金目当ての縁組だったと知りメノル王は激昂した。

ガーナリア国は見栄を張る王に頭に頂いていても軍隊の戦士は勇敢で知られている。
メノル王の出した軍隊はガーナリア軍に迎え撃たれ、偉丈夫と言われていたメノル王の次男は激しい戦闘で命を落とした。

以後堅い守りのガーナリア軍とメノル王国は戦闘状態が続き、近隣諸国は、どの国も勝ったほうの言い分を、正当化させてどちらにもよい顔をしてばかりで仲裁に入る気は微塵も無く、どちらかが疲弊するのを傍観する構えで居る。
戦は続きゲルタ王子の四番目の兄は、勇猛果敢にクワナイ峠で討ち死にし。
三番目の兄はリャワンカの河川敷でガーナリアの軍をおびき寄せ、堤を切って敵軍を四散させたが、ガーナリアの武将に急襲され討ち取られた。
兄の足軽は主の頭部を盗み、息も絶え絶えに馬を飛ばして城に駆け戻ってきた。
城ではガーナリア城へ攻め入る作戦会議が開かれ、庭ではゲルタ王子も剣を手に新兵と訓練の真っ最中、兄が勝利し引き連れた兵士の足音が響くのを待っている。

この日、馬の足音が門の前で止まり、馬からずり落ちた瀕死の足軽の胸から、ゴロゴロと転がって兄の頭がゲルタ王子の足元で止まった。
王子は兄の頭に呆然、良くぞ叫び声を上げなかったと今も思う。

以来、何をするにも死んだ兄の顔が浮かび、ゲルタ王子は落ち着かない。
四番目の兄が戦っているが、大将の一人として戦の最前列で敵と顔

を合わせる日が来るのは時間の問題である。
戦の状況を知らせるだけの早馬でも、ゲルタ王子の心臓の鼓動は早くなる。

激戦区だったリャワンカの河川敷は、堤の大石が転がり人の足で渡るには時間がかかり、河川敷を迂回し、西の商業用通路の低い谷で小競り合いが続いている。

夕食を終え援軍の頭数に入れられなかったゲルタ王子は早々に自室に戻り月が高く上がるの待った。

自室の調度品や高価なもの日頃大事にしている品物に一切手を触れずに
木箱に隠していた短い剣と従姉妹の衣装に着替えるとゲルタ王子は裏門へと向かう。

裏門では最後の夜を町で過ごす兵士の出城を黙認し、遊女を呼び寄せたりと正門よりも忙しく人の行き来が多くある。

日頃従姉妹たちと詩を詠み舞をたしなむ王子は変わり者として知られている。
結い上げていた髪の毛を下ろし薄絹をすっぽりと被れば
優雅な物腰の女性に。

門番の火のそばまで来いと手招きで遠回りで近づき
麦の袋をそっと門番に手渡すといい匂いのするゲルタ王子を門番は
狭い橋の上に追いやった。

（Ｌｅｇｅｎｄ）　ゲルタ王子出奔

夜の街は静かだ。
人の行き来が多い遊女屋の前をゲルタ王子は素通りし町外れまで来ている。
大木のそばで女物衣装から地味な衣服に着替え暗い山の中に足を踏み入れる。

山に入ると朽ちた木のうろを見つけ棒で中を突いて安全を確かめてうろの中で寝ることにした。
強くなった風が枝をしならせる音で目を覚ましたゲルタ王子はじっと空を見上げて山を登り始める。

「さぁさ、いらっしゃい。いらっしゃい。美しい美女が歌いますわ、はかない恋の歌。浮世の逢瀬を遂げられなかった悲恋を歌わせたなら、東西きっての一番の歌姫が今宵壇上にてその美しい旋律であなたをひと時、物語世界にいざないやしょう」
荷車の後ろで揺られながら口上師が朗々と通る声で語りかける。

街道を行過ぎる人、一休みをしている旅人、畑仕事に余念のない村人が手を止めて口上を聞いている。
口上師の声にわざわざ家の外まで出て聞いていた家人は一座が寝泊りする村の名前を心に刻み込んだ。
心躍る美しい舞や歌が聞けるのである。

数年に一度王様に呼ばれて芸を見せる為に逗留場所でちょっとした芸を一座は披露してくれるのだ。

口上師を乗せた荷車が去って数日が経った。

街道には女物の衣服を見につけたゲルタ王子が行き交う人の好色な視線を受けて歩いている。

「旦那さんはいるかえ」
一軒の宿場町で一階が食堂、二階が宿泊所の宿屋にゲルタ王子は足を踏み入れた。

擦り切れた床板の上に簡単な椅子とーテーブルと、奥にカウンター。宿の主の了解を得て簡単な踊りをゲルタ王子は披露した。

踊りのタイトルは妖艶。
従姉妹達がどんなに色っぽく踊ってもゲルタ王子に勝てなかった演目である。

たんたんと足音を立ててリズム良く踊り終わると大道芸人のように深々と頭を下げるゲルタ王子の足元に小さな小袋が投げられる。客の誰とも言葉を交わさず袋を集めると店のカウンターに五袋置いて宿屋を出た。

まだ昼を過ぎたばかり聞いた話だと峠を一つ越えれば女の足でも歩ける宿場町があると聞いている。
ゲルタ王子は女ではないが勤めて女のフリをしている。

国では王子がいなくなったことを父王が知り怒って後を追わせたかそれとも軟弱な息子を哀れんで見捨てることにしたか
王子としては父王の性格からして後者だろうと思っている。
しかし国の大事を見捨て逃げ出した王子の噂はすぐに広まると思い女装して旅を続けている。

従姉妹の衣服は少々巷では派手だが上手いこと踊り子一座が通った

後だけに、
一座を追いかけているというゲルタ王子の嘘は疑われていない。
街道に人がいないときには足早に歩き出来るだけ
山道に一人にならないようにゲルタ王子は気をつけた。

峠を降りてこんもり茂った森の中でゲルタ王子は一息ついた、宿場町は目と鼻の先である。

陽は傾いているもののまだ森の中も明るく
前にも後ろにも旅人がいて安心して歩いていた所へ早足の男が横に並んだと
思ったらゲルタ王子の前に立ちはだかった。

「綺麗なねぇちゃん。さっき稼いだ小袋を分けちゃくれないか。へっへっへっ」
男は宿屋からつけて来ていた。

「おどき。私にだって宿屋に泊まるにはこの袋は大事なものなんだ。一袋だって上げられないよ」
塵除けの薄布の下から男を睨む。

「気の強い女だな。命が惜しくは無いのかよ」
居丈高にゲルタ王子を男が見下ろす。男が一歩前に間合いを詰めて来る。

「あんたのほうこそ。命が惜しくないの」
膝を少し折って身構える。上手いこと足はスカートで隠れている。

「馬鹿言ってんじゃねぇぞ。袋を全部だしな。命だけは助けてやる。

それとも何か痛めつけた上で売り飛ばしてやろうか」
男の大声にゲルタ王子は目を逸らす。
その行動が男を安心させる。
「そうかい、そうかい。素直だね。そうこなくっちゃ」
ゲルタ王子が腰の隠し紐を外し、スカートの中に手を入れると男の顔は隙だらけになる。
スカートの下に突っ込んだ手を出し剣の鞘を抜いて抜き身を男に前に突きつける。
「私を驚かせたね、その駄賃を貰おうじゃないか」
切っ先が良くわかるように手首を返した。
「命はとらないから、あんたの袋の玉を頂こうか」
磨きぬかれた剣先が陽の光を受けてきらきら輝く。
「うっ」
か弱いと思っていた女が短いが切れ味の良さそうな剣を男の鼻ツラに突きつけ反撃してきた。
女に隙はなく剣を扱う手はかなり熟練している。
ぴたりと向けられた剣先から逃げることだけを男は考えた。
脇の茂みがざわつき人の気配を示すとわずかに女の視線が男から逸れた。
「てめぇ見たいな女にやられてたまっかよ！」
と男は街道から逸れて藪の中に飛び込んで姿を消した。

「娘さんや、今のはこの峠の盗賊かえ」
屈強な男を二人従えた一家が後ろから声をかける。

「そちらの二人は旦那様の連れですかえ。助かりました。あの盗賊が顔色を変えて逃げたのはその二人のお陰でございます。ほうー怖かった」

座り込むフリをしてゲルタ王子は剣を鞘に納め腰紐をしっかりと結びなおした。

一家の主は逃げていく盗賊は見えたが警護の連れが追い払ったかのように言う娘の言葉に曖昧な笑顔で答える。
何はともあれ美しい娘御が無事であったと喜んでいる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0997ba/

レジェンド

2012年1月10日18時55分発行